

# 二老人

国木田独歩

青空文庫



## 上

秋は小春のころ、石井という老人が日比谷公園のベンチに腰をおろして休んでいる。老人とは言うものの、やっと六十歳で足腰も達者、至って壮健のほうである。

日はやや西に傾いて赤とんぼの羽がきらきらと光り、風なきに風あるがごとくふわふわと飛んでいる、老人は目をしばたいてそれをながめている、見るともなしに見ている。

空々 寂々 心中なんらの思うこともない体。

老人の前を幾組かの人が通った。老えるも若きも、病めるも健やかなるも。されどたれあつてこの老人を気に留める者もなく、老人もまた人が通ろうと犬が過ぎ行こうと一切おかまいなし、悠々行路の人、縁なくんば眼前千里、ただ静かな穏やかな青空がいつもいつも平等におおうているばかりである。

右の手を左の袂に入れてゴソゴソやっていたが、やがて「朝日」を一本取り出して口にくわえた。今度はマツチを出したが箱が半ばこわれて中身はわずかに五六本しかない。あいにくに二本すりそなつて三本目でやっと火がついた。

スパリスパリといかにもうまそうである。青い煙、白い煙、目の先に透明に光って、渦を巻いて消えゆく。

「オヤ、あれは徳じやないか。」

と石井翁は消えゆく煙の末に浮かび出た洋服姿の年若い紳士を見て思った。芝生を隔てて二十間ばかり先だから判然しない。判然しないが似ている。背格好から歩きつきまで確かに武だと思つたが、彼は足早に過ぎ去つて木陰に隠れてしまった。

この姿のおかげで老人は空々寂々の境にいつまでもいるわけにゆかなくなつた。

甥の山上武は二三日前、石井翁を訪うて、口をきわめてその無為主義を攻撃したのである。武を石井老人はいつも徳と呼ぶ。それは武の幼名を徳助と言つてから、十二三のころ、徳の父が当世流に武と改名さしたのだ。

徳の姿を見ると二三日前の徳の言葉を老人は思い出した。

徳の説く所もまんざら無理ではない。道理はあるが、あの徳の言い草が本気でない。真実彼奴はそう信じて言うわけじやない。あれは当世流の理屈で、だれも言つたと、言わば口前だ。徳の本心はやっぱりわしを引っぱり出して五円でも十円でもかせがそうとするのだ、その証拠には、せんだつてごろまでは遊んで暮らすのはむだだ、足腰の達者なうち

は取れる金なら取るようにするが得だ、叔父さんが出る気さえあればきつと周旋する、どうせ隠居仕事のつもりだから十円だつて決して恥ずるに足らんと云つたくせに、今度はどうだ。人間一生、いやしくも命のある間は遊んで暮らす法はない、病気でない限り死ぬるまで仕事をするのが人間の義務だと言う。まるで理屈の根本が違つて来たじゃないか、――やっぱりわしをかせがすつもりサ……とまで考えて来た時、老人はちやうど一本の煙草たばこをすい切つた。

石井翁は一年前に、ある官職をやめて恩給三百円をもらう身分になった。月に割つて二十五円、一家は妻に二十はたちになるお菊と十八になるお新の二人娘で都合四人ぐらし、銀行に預けた貯金とても高が知れてるから、まず食つて行けないというのが世間並みである。けれども石井翁は少しも苦にしない。

例を車夫や職工にとつて、食つて行けないはずはないと主張するのである。むろん食うに食われない理屈はない、家賃、米代以下お新の学校費まで計算して、なるほど二十五円で間に合ふそうと思えば間に合ふのである。

それで石井翁の主張は、間に合いさえすれば、それでやってゆく。いまさらわしが隠居仕事そうつらうで候のと言つて、腰弁当で会社にせよ役所にせよ病院の会計にせよ、五円十円とかせ

いでみてどうする、わしは長年のお務めを終えて、やれやれ御苦勞であつたと恩給をいただく身分になつたのだ。治まる聖代みよのありがたさに、これぞというしくじりもせず、長わづらいにもかからず、長官にも下僚にも憎まれもいやがられもせず勤め上げて来たのだ。

もはやこうなれば、わしなどはいわゆる聖代の逸民だ。恩給だけでもかくも暮らせるなら、それをありがたく頂戴ちようだいして、すっかり欲から離れて、その日その日を一家むつまじく楽しく暮らすのがあたりまえだ。よしんば二十五円に十円ふえたらどれだけの贅沢ぜいたくができる。——みんな欲で欲には限りがない——役目となれば五円が十円でも、雨の日雪の日にも休むわけにはいけない、やつぱり腰弁当で鼻水をたらして、若い者の中にまじつてよぼよぼと通わなければならぬ。オ、いやな事だ！

というのである。だから役をひいた時、知人やら親族の者が、隠居仕事を勧め、中には先方にほぼ交渉わたりをつけて物にして来てまで勧めたが、ことごとく以上の理由で拒絶してしまつたのである。細君は気軽な人物で何事もあきらめのよいたちだから文句はない。愚痴一つ言わない。お菊お新の二人も、母を助けて飯もたけば八百屋やおやへ使いにも行く。かくてこそ石井翁の無為主義も実行されているのである。

ところが武の母は石井翁の細君の妹だけに、この無為主義をあやぶみ、姉は盲従してこ

そおれ、女はやつぱり女、石井さんの隠居仕事で二十五円の上に十円ふえるならどのくらい楽と思うか知れないと、武をして石井翁を説き落とさすつもりでいるのである。

彼は変物だと最初世話をしかけた者が手をひいた時分。ある日曜日の午後二時ごろ、武は様子を見るべく赤坂区南町の石井をたずねた。俵のはいらぬ路地の中で、三軒長

屋の最端がそれである。中古の建物だから、それほど見苦しくはない。上がり口の四

畳半が玄関なり茶の間なり長火鉢これに伴なう一式が並べてある。隣が八畳、これが座

敷、このほかには台所のそばに薄暗い三畳があるばかり。南向きの縁先一間半ばかりの細長い庭には棚を造り、翁の楽しみの鉢物が並べてある。手狭であるが全体がよく整理されて乱雑なさまは毛ほどもなく、敷居も柱も縁もよくふきこまれて、光っている。

「御免なさい。」と武は上がり口の障子をあげたが、茶の間にだれもいない。

「武です。」とつけ加えた。すると座敷で、

「徳さんかえ、サアお上がり。」と言ったのが叔母である。

武は上がってふすまをあげると、座敷のまん中で叔父叔母さし向かいの囲碁最中！叔父はちよつと武を見て、微笑つて目で挨拶したばかり。叔母は、

「徳さん少し待つておくれ。じき勝負がつくから」と一心不乱の体である。

「どうかごゆつくり。」と徳さんの武もこのほかに挨拶のしようがない。ただあきれ返つて、しようことなしに盤面を見ていた。

「徳さんは碁が打てたかね。」と叔父は打ちながら問うた。

「まるでだめです。」

「でも四つ目殺しぐらいはできるだろう。」

「五目並べならできます。」

「ハハ、ハハ、五目並べじゃしかたがない。」

「叔母さんが碁をお打ちになることは、僕ちつとも知りませんでした。」

「わたしですか、わたしはこれですいぶん古いのですよ。」と叔母は言ったが振り向きもしない。

「しよつちゆう打っていらつしやったのですか。」

「いいえ、やたらに打ちだしたのは此家<sup>ここ</sup>へ引つこんでからですよ。——ちよつとこれ等待てちようだい。」

「なりません。」と石井翁、一ぷくつけてスパリスパリと悠然<sup>ゆうぜん</sup>たるものである。

「だってこの切斷<sup>きり</sup>は全くわたしの見落<sup>みおち</sup>としてですもの。」

「だからさつきから、わしは「待ちませんよ、」「待ちませんよ」と二三度も警告を発しておいたじゃないか。」

「待ちませんはあなたの口癖ですよ。」

「だれがそんな癖をつけました、わたしに。」

武は思わずクスリと笑った。

「それじゃどうあつても待つてくださらんの。」

「マア待ちますまい、癖になるから。」

と言われて、叔母は盤面を見渡してしばらく考えていたが、

「それじゃ投げましょう。そこが切れては碁にはなりませんもの。」

「まずそう言ったような形だね。」

そこで叔母は投げ出した。これから改まって挨拶あいさつが済むと、雑談に移り、武は叔父おじ叔母おさし向かいで、たいがい毎日碁を打つ事、娘ふたりはきょう上野公園に散歩に出かけた事など聞かされた。

右の次第で徳さんの武もついに手をひいて半年余りもたつと、母はやっぱり気になると見えて、どうにかして石井さんを説き落としてくれろと頼む。そこで武も隠居仕事の五円

十円説では到底夫婦さし向かいの碁打ちを説き落とすことはできないと考え、今度は遊食罪惡説を持ち出して滔々とうとうとまくし立ててみた。

石井翁はさんざん徳さんの武に言わしておいたあげく、

「それじゃ、山に隠れて木の実を食い露を飲んでおる人はどうする。」

「あれは仙人せんじんです。」

「仙人だつて人だ。」

「それじゃ叔父おじさんは仙人ですか。」

「市に隠れた仙人のつもりでおるのだ。」

これで武はまたも撃退されてしまったのである。

## 下

さて石井翁は煙草たばこ一本すいおわったところでベンチを立とうとしたが徳の遊食罪惡説がちよつと気にかかりだしたので、また一本取り出してすい初めた。徳の本心を見ぬいている。そして仙人説で撃退はしたものの、なるほど、まだびんしゃんしているのにただ遊ん

で食うているというのはほめたことではないように思われる。それなら何をする。腰弁はまっぴらだ。いなかに行つて百姓でもするか。こいつはいいかも知れんがさし当たつて田地がない。翁は行きづまつてしまつたので、仙人主義を弁護する理屈に立ち返つてしきりと考えこんでいると、どしりとばかり同じベンチに身を投げるように腰をおろした者があつた。振り向いて見るや、

「オヤ河田さん<sup>かわだ</sup>じゃないか。」

先方は全く石井翁に気がつかなかつたものと見えて、翁に声をかけらるるといきなり飛びたつて帽をとり、

「コレはコレは石井さんですか、あなたとはまるきり気がつかんで失礼しました。」とペコペコお辞儀をする。そして顔を少しあからめた様子はよほど狼狽<sup>ろうばい</sup>したらしい、やつぱり六十余りの老人である。

「まあお掛けなさい。そしてその後はどうしました。」

「イヤもうお話にも何にもなりません。」と、腰をおろしながら、

「相変わらずで面目次第もないわけです。」とごま白の乱髪<sup>らんぱつ</sup>に骨太の指を熊手形<sup>くまでがた</sup>にさしこんで手荒くかいた。

石井翁は綿服ながら小ザツパリした衣装なりに引きかえて、この老人河田翁は柳原仕込みやなぎわらしこの荒いスコッチの古洋服を着て、パクパク靴ぐつをはいている。

「でも何かしておられるだろう。」と石井翁はじろじろ河田翁の様子を見ながら聞いた。そして腹の中で、「なるほど相変わらずだな」と思った。

「イヤとてもお話にもなんにも……」とやつぱり頭をかいていたがポケットから鹿皮しかがわのまつ黒になった煙草たばこ入れとひしやげた鉋豆煙管なたまめぎせるとを取り出した。ところがあいにくと煙草はごみまじりの粉ばかり、そのまままたポケットにしまいこんだのを見て、石井翁は

「朝日」を袋とも出して、

「サアおすいなさい。」

「イヤこれはどうも」と河田翁は遠慮なく一本ぬき取って、石井翁から火を借りた。

この二老人は三十歳前後のころ、ある役所で一年余り同僚であつたばかりでなく、石井の親類が河田の親類の親類とかで、石井一家けでは河田翁のうわさは時おり出て、『今何をしているだろう』『ほんとにあんな気の毒な人はない』など言われていたのである。

「しかし遊んでもいなさらんだろうが。」と石井翁はどこまでも心配そうに聞く。

「イヤとてもお話にもなんにも……」

これが河田翁持ち前の一つで、人に対するとはいいたいことも言えなくなり、つまらなく、ついに自分を卑下してしまうのである。

「あなたがわたしの家へ来てからもう五年になるな」と石井翁は以前の事を思い出した。「そうなりますかね、早いものだ……。」

「あの時、あなたが、一杯きげんで『雨の夜に日本よ にっぽん近くねぼけて流れこむ』をうたつて踊った時はおもしろかったがね、ハ、ハ、ハ、ハ、」

「ハ、ハ、ハ」といつしよに笑ったぎり、河田翁は何も言わない。そしてなんとなくそわそわしている。

三十の年に恩人の無理じいに屈して、養子に行き、養子先の娘の半氣違いに辛抱しきれず、ついに敬太郎という男の子を連れて飛びだしてしまい、その子は姉に預けて育ててもらう、それ以後は決して妻帯せず、純然たるひとり者で、とうとう六十余歳まで通して来たのが河田翁の一生である。

このひとり者が翁の不遇の原因をなしたのか、不遇がひとり者の原因であつたのか、これをわかつことはできない。

善人で、酒もしいては飲まず、これという道楽もなく、出入交際の人々には義理を堅く

していて、そしてついに不遇で、いつもまごまごして安定の所を得ず今日きょうが日ひに及んだ翁の運命は、不思議な事としか思えない。

そこで石井の人々初め翁を知っている者はみな『気の毒な人だ』と言い、また不思議なことだと評している。しかし皆々言い合わせたように一致している『理由』がないのでもない。第一、河田さんはいくじがない。その証拠には、養子に行く前に深く言いかわした女があつた、いよいよ養子に行くときまるや五円で帯の片側を買つて、それを手切れ同様に泣く泣く別れた。第二に、案外片意地で高慢なところがあつて、些ささい細な事に腹を立てすぐ衝突して職業から離れてしまう。第三に、妙に遠慮深いところがあること。

なるほどそう聞かされると翁の知人どものいわゆる『理由』は多少の『理由』を成している。

けれど大なる理由がまだなければならぬ。人がもし壮年の時から老人の時まで、純然たる独身生活すなわち親子兄弟の關係からも離れてただ一人、今の社会に住むなら並み大抵の人は河田翁と同様の運命に陥りはせまいか、老いてますます富みかつ榮えるものだろうか。

翁の子敬太郎は翁とまるきり無關係で育ちかつ世に立った。そして二十五六のころ、八や

百屋おやを始めたが、まもなくよして、売卜者うらないしゃになった。かつ今は行き方がたも知れない。そして見ると河田翁その人の脈みやくらくには、『放浪』の血が流れているのではないか。それが敬太郎へも流れこんだのではないか。

石井翁はむろんこういうことを考えて研究もせず、ただ気の毒がる仲間の一人ゆえ、どうにかして今の境遇も聞いてみたいと思い、古い事まで話題にしてみたが、河田翁は少しも引き立たない。ただそわそわしている。

「何時でしょうか」と河田翁は卒然聞いた。石井翁は帯の間から銀時計の大きいのを出して見て、

「三時半です」

「イヤそれじやもう行かなきゃならん。」と河田翁は口早に言つて、急に声を潜め、あたりをきよろきよろ見回しながら、

「実はわたし、このごろある婦人会の集金係をしているのですから、毎日毎日東京じゅうをへめぐらされるので、この年ではとてもやり切れなくなりました、そこでも少し楽な仕事をと頼んで歩きましたら、やつとうまい口が発見めっかつたんです。それは食扶持くいぶちいっさいむこう持ちで月給が七円だということです、それでからだを動かすことはあまりないというん

ですから、さつそくそれに決めたのです。ところが、」とあたりを見回した上にさらに延び上がって近所を見回したが、一段声を潜めて「わたしは大変なことをしているんだ、とかく足らん足らんで一円二円とつかい込み、とうとう十五円ほど会の集金をつかい込んでしまったのです。サアそれもチャンと返して帳簿を整理しておかんと今のうまい口に行く事ができない。そこでこの四五日その十五円の調達にずいぶん駆け回りましたよ。やっと三十間堀の野口という旧友の倅が、返済の道さえ立てば貸してやろうという事になり、きよう四時から五時までの間に先方で会うことになっているのです。まアザツとこんな苦しいわけで……けれどつかい込みの一件は、ごく内密にお願いします」と言つて立ち上がり、石井翁が何も言い得ぬうちに、河田翁は辞儀をペコペコして去ってしまった。

石井翁は取り残されて茫然と河田翁の後ろ姿を見送っていた。

河田翁が延び上がって遠くまで見回したのは巡査がこわかったのだ。そこで翁と巡査とすれ違った時に、河田翁は急に帽子に手をかけて礼をした。石井翁は見ていてその意味がわからなかった。

(完)





## 青空文庫情報

底本：「号外・少年の悲哀 他六篇」岩波文庫、岩波書店

1939（昭和14）年4月17日 第1刷発行

1960（昭和35）年1月25日 第14刷改版発行

1981（昭和56）年4月10日 第34刷発行

入力：紅 邪鬼

校正：鈴木厚司

2000年7月12日公開

2004年6月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 二老人

国木田独歩

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>